# 回路

登場人物

青田　良（計算課）

山瀬　久美子（庶務課、良と同期）

吉田　光（３８）

猫町の女（２０）

計算課社員

山村（課長）

佐々木（勤続３５年の社員）

関（勤続２５年の古参社員）

岡本（勤続２０年の社員）

山田（勤続１５年の女子社員）

計算課社員Ａ、Ｂ

アークシステム社員

社員Ａ、Ｂ

その他

専務

猫町の住民

## 開幕前

舞台と客席を分離しない。客席も含めて、一つの世界であり、体験である。連続する空間と時間。舞台は前方と後方に分ける。後方は計算課。前方はほおずき市、路上等のあまり奥行きを必要としない場面に用いる。暗転の長短に気をつける。闇は観客の想像の場になる。そろばん以外の小道具を使う所作は全てふりで。

闇の中で何かが動く気配がする。数分前から（予定された開幕前の時刻から）、すでに芝居は始まっている。開幕ベルはならない。

算盤を振る音。ザッ、ザッ、ザッ。算盤の音が止む。幕が開く。

## 一　ほおずき市

舞台奥は計算課（無音、薄暗い）。算盤を弾く社員たち。算盤で肩を叩くマイム。電話を取るマイム。上手から、青田良、山瀬久美子登場する。舞台中央で、二人が立ち止まる。

良　二つ下さい。鉢は入らない。普通はダメだけど、まぁいいやって。１つ１０円。ゴメンね、おじさん。

ほおずきを受け取る。

久美子　ほおずき？

良　そう。ほおずき市にほおずきがなくっちゃね。

久美子　はじめて見た。

良　君は都会育ちだから。

久美子　良もでしょ。

良　父さんの田舎にいっぱいあったよ。ほおずきの実を根気よく揉んで、中身を出す。ほら。そして、口に入れる。やってみる。

ほおずきを久美子に渡す。二人、下手に数歩歩く。

久美子　鳴らないね。

良も試してみる。

良　（試してみる）鳴らないね。

下手に歩く。

良　忘れてしまったんだ。昔の遊び。（間）ほおずきを鳴らして、小川の草むらの中でほたるを見ていた。闇の中で光っているんだよ。小さな夢のように。

久美子　遠い昔の夢のように。

二人、下手に消える。舞台奥の計算課が明るくなる。職場の喧噪。電話の音。算盤をはじく音。

二　計算課（昼前）

関、山田、岡本、佐々木、山村、その他に社員Ａ、Ｂ。

関　あほた。

良　はい。

社員がどっと笑う。

山田（女）（笑いながら）青田君でしょ。名前ぐらいちゃんと呼んであげて。

関　通じりゃいいの。ちゃんと返事してるじゃない。俺カツ丼ね。

岡本　俺は焼きそばと飯大。

良、岡本に近づく。

良　はい。

岡本　ついでに煙草。

良　ハイライトですね。

岡本　（憮然と）そうだよ。いちいち言わすなよ。

山田　あら、Ｂ５ノートがないわ。

良　後で、庶務課から。

山田　後では遅い。

良　今すぐに。

下手に駆け出す。

山田　鉛筆、ノート、消しゴム、ボールペンは計算課の命よ。切ら

さないできちんと補充しておくこと。青田君、君の仕事でしょ。

下手に、久美子。

良　山瀬さん、Ｂ５ノート。

久美子　えっ、はい。

ノートを渡す。

良　ありがとう。

良、背を向けて駆け出そうとする。

久美子　青田君。

良　えっ。

久美子　何でもない。

良、笑顔を返す。駆け出す。山田のデスクに。

良　遅くなりました。

山田、無言で受け取る。

良　佐々木さん電話をお借りします。

佐々木　どうぞ。

佐々木は、他の社員と違って電卓を人差し指で叩いている。良、受話器を取る。

良　光物産、計算課です。ラーメン２つに、カツ丼一つ、焼きそばとライス大盛り、昼定２つ。

良、受話器を置く。

佐々木　わるいね。昼休みにショートピースを２つ頼むよ。

良　はい。

佐々木　大卒さんにこんな事をさせていいのかなあ。

良　三流大学ですから。

佐々木　私なんか、専門学校だよ。それも夜間だ。それに、みんなのように算盤が出来ない。電卓専門。算盤の方が圧倒的に速い。

みんな人差し指の佐々やんと馬鹿にしている。君もだろ。

良　とんでもない佐々木さん。僕も算盤、出来ませんよ。

算盤の音が少しずつ大きくなっていく。算盤を振る音になる。下手にスポット。吉田が背を向けて立っている。台車に段ボールの箱を乗せて、男二人が上手より入ってくる。

男１　すいません、道をあけてください。

関　何だよ、それ。

男１　コンピューターです。

関　コンピューター？俺には箱にしか見えない。

男２　まあ、箱ですけれど。

男達は箱の中から、部品を取り出し、運び込んできたデスクに手際よくセットし始めた。ＮＥＣ９８シリーズがあればグッド。

吉田が、ゆっくりと入ってくる。セールスマンでもなければ、技術屋でもない。また、サラリーマンでもない奇妙な雰囲気を持っている。ネクタイは派手だが背広は地味…。

【参考】一般的な職場の電算化にコンピューターが導入され始めたのは、１９８０年半ばです。まだ２０年たらずの歴史です。このドラマの設定は１９９０年頃から１０年間です。

山村　みんな集まってくれ。

職場の喧噪は止まない。山村が手を叩く。ぞろぞろと立ち上がり、気乗りしない感じで集まってくる。

山村　えっと。（間）

山村　お名前は？

吉田　私のですか？

山村　ええ、当然。

吉田　アークシステムの吉田です。これで、よしだ。

良だけ笑う。

吉田　（嬉しそうに）うけた。

山村　それじゃ、吉田さん説明してください。

吉田　これは計算機です。

吉田、言葉に詰まる。しかし、焦らない、ぼんやりと目を

宙にさまよわせている。

岡本　はやくやってよ。

関　忙しいんだよ。

吉田　算盤の代わりと。

関　（苛つきながら）これが俺達の仕事をするっていうの。

吉田　一部分です。主に計算です。みなさんのようにご飯は食べません。ついでながら、うんこもしません。

山田　下品。

吉田　（激怒する）下品？あんたうんこしませんか？

山田　なによ、この人。

山村　あの、う…はいいから。話を進めて。

吉田　重要な問題だと思いますが。僕なにか下品なこと言いましたか。

山村　まあ、まあ。

吉田　すいません。どうでもいいことでした。皆様方のお仕事が計算だけでないのは、よく理解しているつもりです。それに、この機械は、あくまでも当方の都合でお願いしたわけでありまして、ご協力願いたいのです。

岡本　謝礼は出るの？

吉田　製品化されましたら、それなりに。

岡本　モルモットになる時間はないなあ。

吉田　使っていただいて、こんな所がわるい、ここをこう変えたらどうかとか、現場の意見を私どもは期待しているのです。

（間）。課長さん、さっき、私「一部分」って言いましたっけ。

山村　仕事の一部分って。

吉田　訂正します。うんこを除いて「全てに」。

山村　（あきれたように）あんた、しつこいね。

吉田　自分の言葉に責任を取っているだけです。

関　俺達の仕事を全てこの箱がするって言うのか。

吉田　ええ、まあ。

社員の、あきれたような声。「仕事だ、仕事だ」という声も混じる。自分のデスクに戻る。再び、算盤の音。電話の音。良、久美子が上手。計算課（無音、薄暗い）は舞台奥へ。

三　ほおずき市

久美子　あっ、鳴った。

良、久美子を見る。

良　（笑う）まだ、やってたの。

久美子　ね。

良　聞こえない。

久美子　もっと寄って。

良、耳を久美子の口に近づける。

良　うん、聞こえる。キュル、キュル。

久美子　良もやってみる。

久美子、ほおずきを口から出す。

良　いいよ、俺。

久美子、ふっと目を伏せる。ゆっくりと顔を上げる。舞台の奥に目をやる。

久美子　良、ホタルを売っているよ。買っていい。

良　ホタル？

良　いくら、おじさん。

（マイムで）虫籠を目の高さに持ち上げる。二人顔を寄せ合って、中を見る。

久美子　光っている。来てよかったね。

良　うん。

突然かごを差し上げて、回し始める久美子。

久美子　ほっ、ほっ、ホタル来い
あっちの水を辛いぞ

舞うように、歌いながら、突然蹲る。追いかけてきた良は、背を向けたまま、静止する。ホタルをイメージするライトが、次々に乱舞する。良が下手に消える。久美子だけにスポットが当たる。顔を上げる。周りを見回す。良を探す。

久美子　良！。スポットが消える。

四　　計算課（午後）

コンピューターの前に、良が腰掛けている。無音。社員は静止している。

良（語り）　コンピューターのことを社員は箱と言った。巨大なダンボール箱に入ってきた何の飾りもないアイボリー色の箱。一週間経っても、箱を触るものは誰もいなかった。机がなかった私のデスクになった。

人が動き始める。

山田　青田君、コーヒー、頼む。

良　はい。

岡本　俺も頼む。ミルクなし。（背伸びをする）休憩、休憩、働き過ぎだよ俺たち。

良　はい。

良、椅子から立ち上がる。

吉田　（遠くから）コーヒー、十分待って下さい。

上手から吉田が現れる。

関　部外者が…。（続けようとするが言葉を飲む）

吉田、ディスプレーを指でなぞる。埃がついた指にふっと、息を吹きかける。

吉田　どうですか、調子は？

良　使っていません。使い方を教えてもらっていないから。

吉田　説明書を入れておいたから、いいかなあって。

吉田、抽出を開ける。説明書を取り出す。良、説明書を覗き込む。

良　おそろしく下手な字ですね。説明の説がひらがなだ。

吉田　分かればいい。でも、あなた素直だなあ。コンピューター向きですよ。
良　そうですか。
吉田　素直が一番。さて、スイッチを入れて下さい。（けたけたと奇妙な笑い声を出す）スイッチ入れなけゃ、ただの箱ですから。スイッチの順番は、中央のこれを本体のスイッチを最後にしてもらえたら、他はどうでもいいです。

良、本体のスイッチを入れる。

吉田　それが最後って言ってるだろう。
良　（弾かれたように）はい。
吉田　スイッチの入れ方で記録が消えたって話は聞いたことがないですが、可能性があれば止めるべきでしょうなあ。でも、ふっと、記録が消えてしまうことがあるんですよ。幽霊みたいに。宇宙線が原因かもしれない。
関　紙に書くの一番だ。
吉田　（声を潜める）自分が機械の代わりをしているのを気づいていないんですよ。

吉田、　ディスプレーを叩く。

吉田　こんなのはまだおもちゃですよ。十年後には、もっとすごいのが出来てますよ。この部屋も静かになる。（声を潜める）そろばんの音って喧しいですね。
山田　コーヒー、飲みたいなあ。
吉田　入力が終ったとして、このコピーというボタンを押してください。ＯＫ表示が出たら、この裏側にあるレコード盤のようなものを抜き出してください。

吉田、フロッピーディスクを抜き出す。

吉田　はい、この中にコンピューターの記憶がコピーされました。このジャケットに入れて、なるべく、機械から離れた場所に保存してください。理由は分かりますね。誰かが（関の方を見る）、機械にコーヒーをぶっかけても、記録は消えない。
関　気にくわないなあ、あんたの態度。

吉田、視線をフロッピーディスクに戻す。

吉田　（小さく）吠えるなよ。

関が立ち上がりかけるが、山田に止められる。

吉田　それと、この部分は手で触らないように。（猥褻な連想を混じり込ませて）敏感な部分なんでね。それじゃ、社員資料をインプットしましょう。

良　ちょっと、待って下さい。コーヒーを。

吉田　少なくとも、他人のコーヒーをいれるより大切な仕事ですよ。

関が立ち上がる。

関　職場には職場の掟があるんだ。そろばんが出来ない奴は雑用をする。大卒なんか関係ない。計算課の掟だ。

岡本　そうだ。そんな機械、おもちゃだ。

山田　競争しましょうか。その箱と。１から５０まで順番に足しましょう。

吉田　いいですよ。プログラムを作ります。

吉田、キー入力する。

吉田　ＯＫです。

山田・吉田　５５。

良　同時。

吉田　じゃ、１万まで。（間）。５００万５０００。

岡本　インチキだ。現実には、無意味な計算だ。

山田　そうよ。

山村　みんな静かに。これはトライなんだ。協力しようじゃないか。何を苛立ってんだ。

関　苛立っている？なんか面白くないね。自分の仕事が馬鹿にされているようでね。俺達はプロなんだ。

山村　そうだ、プロだ。計算課は、我が社の中枢であることには変わりがない。

良　とにかく、コーヒーをいれます。

山村　いいよ、青田君。続けなさい。

暗転。

五　計算課（夜）

吉田と良だけになる。良はディスプレーに向かって入力をしている。

吉田　いっぺんに静かになっちゃった。ちょっと窓を開けますか。
良　開かないですよ。
吉田　何故？
吉田　知らない。

吉田が窓際に行く。

吉田　開かずの窓か…。あれっ、雨が降ってきた。ビルに囲まれて、平屋が３０件ぐらいあるなあ。いや、５０件かな。日当たりはよくないですね。
良　あまり窓の外は見ないですよ。この部屋には季節がないから。雨の音も聞こえないし。コマネズミみたいに走り回って１日が終わる。いつも同じ季節の中にいるように。

良、キーを打つ。

吉田　確かに、雨の音が聞こえない…。うちの事務所と大違いだ。雨の音どころか、雨が吹き込んでくる。
良　（笑いながら）傘をさしてプログラムを作ってるんですか？
吉田　まさか。ラーメン食いながら作ってますけどね。
良　楽しいですか？
吉田　楽しいですよ。コンピューターは俺を騙さない。鏡みたいなもんだなあ。みんな俺なんですよ。あっ、商店もあるなあ。あれは銭湯かなぁ。ここ何階ですか。
良　８階です。
吉田　もう、風が冷たいですね。しじまの窓に雨が降る。
良　吉田さん詩人だなあ。
吉田　ええ、詩人ですよ。詩人だからプログラムが作れる。同じなんです。詩を作るのも、プログラムを書くのも。そうじゃなくなったら…。
良　そうじゃなくなったら？
吉田　俺、やばいかしれない。そう思わない？
良　分からないすよ。僕は言われた通りやっているだけだから。この箱の中で何がどう動いているのか全く分からない。結果だけしか見ていない。
吉田　いずれみんなそうなる。後十年も経てば、何が動いているの

か分からなくなる。見えなくなる。

吉田、もう一度窓を開けようとする。窓が開く。勢いで倒れる。雨の音。立ち上がる吉田。雨の音に、キー入力する音が混じる。キー入力する音が大きくなる。そして、ふっと消える。吉田が窓を急いで閉める。

吉田　（ふと）何故、雨が降るんだろう？

良　さあ…。

吉田　この世の中の全部出来すぎてるよ。

良　あっ、間違った。吉田さん、黙っててくれますか。

吉田　誰かが造ったような気がする。

良　（キー入力する手を止める）誰か？

吉田　何かかもしれないけど、そんなこと考えたことないですか。

良　ないですよ。

吉田　出来すぎてるんです、何もかも。全てつじつまが合っている。人間から、細菌にいたるまで。銀河から原子にいたるまで。誰かがきっちりと造った。僕らは小さな箱の中で飼われているのかもしれない。きっとパパが、バースディプレゼントに買ってやったんだ。

良　ちょっとついていけないですけど。

吉田　雨が降るわけも分かる。雨が降らなければ、大変なことになる。それも理解できますね。でも、何故、雨が降るんだろう？

良　何故？

吉田　アボガドロ数って知ってますか。

良　昔聞いたような。

吉田　みんな６×１０の２３乗なんです。Ｅ＝ＭＣの二乗。これも美しすぎる。おかしいと思いません。銀河も子供のペット空間かもしれないし。ひょっとすると、私たちは精巧なロボットかもしれない。細胞は部品、脳は中央演算装置、そして、そして、みんな結ばれている。神経、ホルモン…。そして、そして、どこかにバッテリーがあるんだ。命というバッテリー。（叫ぶ）みんな、こいつと同（おんな）じだ。

吉田、キーボードを両手で押さえる。

良　吉田さん…。

吉田の顔を見上げる良。下手から、久美子が入ってくる。

久美子　まだ、明かりがついていたから。
良　もう少しだよ。庶務の山瀬久美子さん。
　去年入社の同期ですよ。
吉田　アークシステムの吉田です。もう吉田。
久美子　えっ？
吉田　ショックだ、通じない。
久美子　お弁当、買ってきたの。

久美子、デスクに弁当を置く。そして、コートを脱ぐ。

良　寒かった。ごめんね。
吉田　すいませんねぇ。
久美子　あのう。一人かなあと思って。
吉田　私だけですよ。私、釜戸屋のほっかほっが弁当大好きです
　よ。
久美子　（あきらめて）お茶を入れてきます。

久美子、下手に消える。

良　（独り言のように）彼女、僕が一人で残業していると思ってい
　たのかなあ。
吉田　（ハッと気が付く）そろそろ、私、帰ります。
良　割り箸ありますから、三人で食べませんか。

良が割り箸を取りに行く。吉田が机の上のはさみを取る。
弁当の紐を切る。割り箸、弁当、はさみはマイムで。

良　はさみを使うほどでもないのに。紐は簡単にほどけますよ。
吉田　えへへ、紐をほどくのが苦手なんですよ。（はさみを見る）
　はさみは紐を切る。はさみよりコンピューターの方がよっぽど人
　間に近いですよ。考えてくれる道具だから。人間の方がよっぽど
　怖い。コンピューターは人を裏切らない。（間）でも、世の中が
　すっぽりこいつになってしまったら、生きていけないなあ。
良　世の中がすっぽり？
吉田　言い換えれば、僕がねぇ、この箱の中に入ってしまったら。
良　分からないですね。
吉田　二人とも、もう、片足が入っているのかも知れないよ。世の
　中がこいつを真似るんだ。一番最初に人間がこいつを真似る。
良　人間がコンピューターを真似る。（間）分からないすね。
吉田　（ふと思い出したように）彼女、遅いなあ。

二人が窓際に移動する。弁当を食べるマイム。

吉田　そのかまぼこ。（箸でつまむマイム）好きなんですよ。
良　意外とあつかましいですね。
吉田　卵焼きも好物で。青田さんは嫌いですか？

良が呆れたように窓の外を見る。

良　ホタルだ。
吉田　ホタル？
良　そんなわけないすね。
吉田　ホタルって雨の中を飛ぶんですか？
良　季節も違うし、こんな都会でホタルがいるわけがない。
吉田　新種かも知れない。
良　新種ですか…。

部屋が暗転する。下手に久美子がしゃがんでいる。両手を組んで、中にホタルがいるマイム。

六　ほおずき市

久美子　上手に飼えば、１０日は生きているって…。１０日か…。短い夢のようだね。

久美子が歌う。

ホタル（挿入歌）

光る、光る、小さな夢のように
光る、光る、短い詩（うた）のように
たった１つの光、
たった１つのいのち
光る、光る、小さな恋のように
光る、光る、短い愛のように

ほっ、ほっ、ホタル来い
ほっ、ほっ、ホタル来い

明日は消える、たった１つの光、

明日は消える、たった１つのいのち、
ほっ、ほっ、ホタル来い
ほっ、ほっ、ホタル来い

徐々に暗転。

七　計算課（朝）

キー入力する良。ディスプレーを肩越しに見る吉田。

関　あほた。
山田　お勉強中よ。
岡本　そうか。お給料もらってお勉強とは、いいご身分で。
吉田　現物をインプットしましょう。
良　これは…。
吉田　佐々木さんの担当です。現金出納１／１ですか。

佐々木、一瞬目を上げて、良を見る。すぐに目を逸らせて、机の上の書類に目を落す。

吉田　課長の許可は取ってあります。（間）どうぞ。

良、キー入力をする。

吉田　完了しましたね。それでは、書類作成のキーを、１番ですね。押してください。佐々木さん、十月分の資料お願いします。

佐々木が立ち上がり、書類を持って吉田に近づいてくる。

吉田　すいません。

吉田、プリントアウトされた用紙を抜き取る。佐々木の資料と見比べる。

吉田　（間）合わない。ルーチンが違っていたかなあ。
佐々木　交通費が抜けているんですよ。月報を作った後だったもんで…。でもね、次の月に入れてます。きちっと
吉田　いや、いや、合えばいいんですよ、合えば。

職場の喧噪が止む。吉田、社員が消えて、一人、良がコンピューターに向かい合っている。

八　計算課（午後５時）

良（語り）　箱が来て、３週間経った。箱の前に座ると、心が和む。自分の場所が与えられたからだろうか。部屋のざわめきも、電話のベルも遠くで聞こえているような気持ちになった。算盤の音も。

岡本が近づいてくる。背後から作業を観察する。そして、去っていく。後に、山田、関と続く。

良（語り）　最初は、後ろから覗き込むものがいたが、一切無視して、キーを押し続けた。一週間も経つと誰も私の作業を覗き込むものはいなくなった。

社員が席に着く。職場のざわめき。関が良に近づいてくる。

関　青田君、１０２番の資料を出してくれ。

良　えっ？

山村　（遠くから）岡本君ちょっと待ってくれ。

山村が立ち上がる。

関　参考にするだけです。箱がどの程度の仕事をしているか知りたいだけですよ。

山村　君には関係のないことだ。

関　関係ない。同じ仕事を機械と人間にやらせて、天秤に掛けてるんですか。

山村　君は機械に取って代わられるような仕事をしているのかね。

関、良に一瞥して、席に戻る。上手から、吉田が現れる。

吉田　やっ。

良、無言で会釈する。

吉田　何かあったんですか、いやに静かだなあ。

良　別に。
吉田　キー入力が速くなりましたね。
良　数字だけですから。
吉田　何か問題はありませんか？
良　今のところは。
吉田　（良の肩を抱くようにして、声を落とす）一人で全員の仕事、やってんですからね。作成した資料を見られちゃダメですよ。抽出に鍵をかけてますよね。
良　ええ。
吉田　ちょっと、私の仕事場を見学に来ませんか？車で１０分、自転車で５分。
良　課長に。
吉田　電話で了解取っておきました。さあ、行きましょう。

上手が吉田のオフィスに変わる。

九　吉田のオフィス

部屋の中央にコンピューターが３台。細長いテーブルがあり、その上に本や書類が乱雑に置いてある。週刊誌、スポーツ新聞もある。どぎつい漫画も混じっている。下手に巨大な段ボール箱。

吉田　汚いところで申し訳ない。掃除をしよう何て殊勝な奴は誰もいなんだから。

ラフな私服を着た４人の男がいる。

社員１　（キーボードを叩きながら）また、落ちちゃったよ。
社員２　昨日の酒が残ってるんだよ。
吉田　こいつ等、給料何てないんですよ。みんな出来高払い。０円の月もあれば、１００万稼ぐ月もある。

良、下手の箱に気づく。

吉田　ああ、あれね。あそこに入って、考えるんですよ。
社員２　嘘だ、ほとんど寝ている。
吉田　ばらすなよ、お前。ちょっと入ってみますか。
良　いや、結構です。
吉田　居心地はいいですよ、まあ、何事も体験。

良、箱の中にはいる。

良　どういう仕掛けなのか、音が消えた。何処までも続く闇の中に取り残されたような気がする。
吉田（声）　そこにある電話を取って下さい。
良　電話？
吉田　あるでしょ、足下に。
良　（紙の筒を拾う）これ？
吉田　糸電話。外との唯一の通信手段です。
良　（笑う）外の声、聞こえてますよ。

良、苦笑いしながら、糸電話を耳にあてる。

吉田　聞こえますか。
良　ええ。
吉田　何か話して下さい。
良　何かって？
吉田　好きな食べ物は？
良　牛丼かなあ。安くて早くて腹持ちがいいし。
吉田　今日のウンコは？
良　また、それですか。
吉田　（語気を強める）そろそろ本当の事を言ったらどうだ。
良　ウンコの話が本当の事ですか？
吉田　いや、ゴメン。何が本当の事か分からないんですよ、僕は。
良　僕も分からないですよ。
吉田　そうですか、他人はみんな分かっているのかと思っていた。（間）。そこで、つまらん事を考えてるんですよ。たとえば、夢についてとか。
良　夢。
吉田　夢が現実で、現実だと思っている世界が、夢だとしたら。
良　不思議なことを考えますね。
吉田　生きているってことは一瞬で、それ以外は全て夢だとしたら。
良　夢が現実に置き換わるだけですよ。
吉田　そうか。一つ現実的な問題として。
良　（笑う）夢の方ですか。
吉田　夢の方です。機械に言葉を喋らそうと思っているんです。
良　機械に言葉を。
機械（声）　こんばんわ。

吉田（声）　聞こえた？
良　ええ。
吉田　まだ、まだ、人の声にはほど遠いですか。
社員１（声）　（遠くで）テープレコーダーがあるんだよ。
吉田　（ムキになって）あれは人間の声だ。俺が言ってるのは、機械が喋るんだ。自分の意志で。

社員の笑い声。良以外は退場。

十　箱の中

良　箱が来てから、半年、私にとって、平穏な職場での時間が過ぎて行った。彼等が私のことを「箱」とあだなで呼んでいることも知っている。「箱」か…」

下手から、久美子。

久美子　青田君。
山田（声）　箱の彼女のお出まし。
岡本（声）　箱の彼女なら、玉手箱（笑い）
良　ああ、山瀬さん。
久美子　お昼、一緒に。
良　もう少し。
久美子　そう。

久美子が下手に消える。

良　２年間に三度機械が入れ替わった。そのたびに少しずつシステムが変わった。コピーを別の場所に保存する必要もなくなり、作成資料にグラフが加わった。それと反比例するように箱の大きさは少しずつ小さくなった。

少し小さな段ボール箱が、舞台下手から、現れる。良、箱から出て、その箱の中に入る。

良　箱と職場は幸せな平衡を保っているように思われた。だが、３年目の４月、職場を突然嵐が駆け抜けていった。二人の社員が辞めた後、補充はなかった。次ぎに関さんが閑職に追いやられた。嵐は止まなかった。６月には山田さん、岡本さんと辞令が続いた。山田さんは退職し、岡本さんは地方にとんだ。定年に近い佐

々木さんと私だけが残った。下手から、佐々木。
佐々木　帰りに一寸、一杯やろうか。
良　あまり酒飲めないです。
佐々木　相談があるんだ。

佐々木が上手の椅子に腰を下ろす。良が箱から出て、佐々木の隣の椅子に腰を下ろす。

良　高級な店ですね。はじめてですよこんな店。佐々木さんはよく来られるんですか？
佐々木　まあ、まあ、何でも注文してくれていいよ。私の奢りだから。俺はと。品書きを見る。本日のおすすめは「海老のおどり」か。それをもらおうか。君は？
良　ええ、私も。

佐々木が速いピッチでビールを飲む。（マイム）。

佐々木　ひらは俺と君だけが残っちまったねぇ。
良　ええ。
佐々木　仲良くやろうよ。
良　はい。（無邪気に）おいしいです。こんなの食べたことないなあ
佐々木　そう、それはよかった。

佐々木がビールを一気に飲み干す。（マイム）。

佐々木　実は頼みがあるんだ。君の作成資料を参考にしたいんだ。

佐々木、額をカウンターにぶつけるように頭を下げる。

佐々木　楽をしょうというんじゃないんだ。（間）私も苦しいんだよ、家のローンも残っている。子供はまだ学生だ。
良　…。
佐々木　石を積んで、崩す、そんな作業だよ俺がやっているのは。答えは出ている。正確な答えが。
良　だけど、僕が見せるわけには。照合の意味がなくなります。
佐々木　とっくに終わっているんだよそんなこと。君が一番よく知っている。間違うのはいつも私だ。

佐々木、額をカウンターにぶつけるように頭を下げる。

佐々木　率直に言うよ。机の引き出しに鍵をかけないで帰って欲しい。
良　それは出来ないですよ。
佐々木　そうか。やっぱり無駄だったか。

佐々木、ゆっくりと頭を上げる。

佐々木　まあ、飲もうか。
良　ええ。

十一　計算課（朝）

山村　佐々木さん、青田君、一寸来てくれ。

二人立ち上がる。

山村　三人になったなあ。近々、派遣会社から一人短大出の子が入る。可愛い子だよ。それと、佐々木さん、来月から、箱がもう一つ来る。青木君の仕事を分担して欲しい。
佐々木　私が箱を…。
良　大丈夫ですよ。僕もプログラムなんか知らないんですから。

山村、背を向ける。舞台奥に巨大な窓がある。

山村　佐々木さん頼みがあるんだ。短期間だったんで、送別会も出来なかった。出来るかぎり辞めていった連中を集めて欲しいんだ。一言みんなに謝りたい。酒を飲んで気持ちよくサヨナラを言いたいんだ。あんたとは長いつき合いだから、分かってくれるよな俺の気持。

計算課が暗転。

十二　送別会（舞台前方）

岡本、山田、山村、良が座っている。その他に、社員が二人。

岡本　半日休暇を取って来たよ。
佐々木　それはご苦労さん。

岡本　佐々木さんが発起人じゃ断れませんよ。
佐々木　ありがとう。滋賀県はどうだね。
岡本　売り子やってるんですよ。今日は安いよ、安いよ。なんてね。慣れない仕事は辛いですよ。
佐々木　そうか。残るも地獄、行くも地獄か。
岡本　まあ、食べるためにはね。山田さんは、どう？
山田　専業主婦。算盤弾いて家計簿をつけてるわ。
岡本　家庭には箱は来ないか。

山村、立ち上がる。

山村　みんなの元気そうな顔を見て、これほど嬉しいことはない。上司として、一言謝りたかった。すまん。この一言しか俺にはない。

山村、深く頭を下げる。

岡本　課長のせいじゃないよ。

一拍置いて１つだけ、岡本が拍手する。ぱらぱらと拍手が起きる。酒をついで回る山村。談笑する。

山村　同士だからな俺達は。
岡本　同士ですよ俺達は。
山田　美人の同士もいますよ。
山村　ますます美人に磨きがかかった。
山田　青田君、相変わらず静かねぇ。
岡本　歌でもやったらどうだ。

拍手が起きる。

良　歌はどうも。
山村　なんでもいいんだよ。
岡本　みなさん、青田君が歌います。

拍手。立ち上がる良。

良　貴様と俺とは同期の桜。

部屋が静まりかえる。

岡本　お前の同期は箱じゃないか。
良　同じ航空隊の庭に咲く。

襖を激しく開けて、関が入ってくる。

関　（酒のために舌がもつれている）いや、みんな遅れて悪い。お通夜みたいだろうと思っていたのに、意外に賑やか、結構、結構。

よろめきながら、良の前にやってくる。

関　いや、青田が、青田君が歌うなんて初めて聞いた。
岡本　関さんご機嫌だなあ。
関　機械、飲め。機械にも油が必要だろう。

笑いが起きる。

関　（手を打つ）そうだ、俺達は口から飲むが、機械は何処から飲むんだ。
山村　小便でも行くか。

山村が部屋を出る。

岡本　そうだもっと下だよなあ。
良　止めてください。
関　機械が喋るな。
山田　（笑いながら）そんな、かわいそうよ。

岡本が良を羽交い締めにする。後ろに倒される良。関が良のバンドを外す。一気にズボンと下着が同時に下ろされる。一瞬下半身がむき出しになる。暗転。

山田　（笑いながら）いやだあ。
良　足を離して下さい。
関　おっ、かわいらしい口をしとるなあ。たっぷり油をやる。
良　関さん、止めてください。
岡本　機械が喋るな。
良（声）　誰だろう？足を押さえているのは。ほんの数分のことだったかも知れない。だが、何時間も彼等の前に下半身を曝してい

たように思われた。
佐々木　もうやめてやってくれ。
良（声）　三方からかかっていた力がすーと抜けた。

照明。良、急いで体を起こし、手で性器を隠しながら、ズボンを上げる。関を睨む良。

関　なんだよその目は。
岡本　箱が怒るのか。
佐々木　もうやめよう、なぁ、。

佐々木が、散らかったものを集める。（マイム）。良が部屋を飛び出す。暗転。

十三　路上（舞台前方）

下手に良。猫のなきごえ。その方向から、女の声。

女　あたしとつき合わない？
良　…。
女　怖くないよ。あたし一人だから。やくざなんかいないよ。ピンで仕事してるの。
良　お金持ってない。
女　いくらならあるの？

良、指を一本立てる。

女　いいよ、それで。

闇の中から女が現れる。女は猫を抱いている。暗転。

十四　女の部屋（計算課の上手）

下から小さく演歌が聞こえる。良、女の胸に顔を埋め泣く。良の肩を女が優しく撫でる。

女　初めてだったの。

良が頷く。

女　いくらでも泣いていいよ。
良　ありがとう。
女　つらい事があったんだ。
良　ズボンを脱がされた。下着までね。機械だから、油がいるだろうって。酒を。
女　ひどいことをするね。あんた、機械じゃないよ。おまんこ出来るんだから。

女が良の下腹部に手を当てる。

女　もう一回、する？
良　こうしている方がいい。
女　そう。遠慮しないで。ね。あたしはここで、おまんこ売って生きている女だから。あんたのことなんか、あんたが、この部屋、出ていっちまえば直ぐに忘れてしまう。無責任でいいのよ。（笑う）あんたもそうだね。

良が頭をずらして、女の足の間に顔を埋める。

女　おまんこ、見る？

女、膝を立てる。猫が２度なく。暗転。良の姿はない。女、立ち上がる。畳の上に落ちた１万円札を手に取る。そして、人差し指で弾く。

十五　路上（舞台前方）

下手に、久美子が立っている。

久美子　青田君…。
良　山瀬さん…。
久美子　探してた。会えるまで探そうって。心配で、お店へ行ったの。そうしたら、帰ったって。いやな予感がしたの。何があったの。
良　何もない。
久美子　私のアパート、近いの。寄っていかない。
良　いいよ。
久美子　猫町でお酒を買おうよ。
良　猫町？
久美子　会社の窓から見えるでしょ、この町。私はこの町を通って

会社に来ているの。町内に猫がたくさんいる。だから、私がつけたの、猫町って。

良、笑う。

良　君がつけたの。
久美子　よかった。
良　えっ。
久美子　笑ってくれたから。お酒、買ってくるね。
良　いいよ僕が行く。
久美子　いいの、いいの。ビールで乾杯しよう

久美子、下手に消える。猫のなきごえ。良、上手を振り返る。

十六　久美子のマンション（計算課の上手）

久美子がビールを注ぐ。

久美子　飲もう。
良　ありがとう。
久美子　ありがとうは、もういい。
良　素敵なマンションだね。
久美子　広すぎるの。一人じゃ。
良　えっ。
久美子　何でもない。

十七　計算課（午後）

上手から、男たちが段ボールを台車に乗せて運んでくる。

男１　何処に置きますか？
佐々木　（嬉々として）窓側の机ね。

男、台車を押す。

男１　もう一つ荷物がありますんで。

もう一人の男が台車押して上手から現れる。

男２　ここまで運んできてやったんだ。いい加減に出て来いよ。
（笑いながら）吉田が中にいるんです。会社からずーと箱に入ってきたんです。

吉田が箱の中から出てくる。

吉田　安部公房の「箱男」のように、箱の中で哲学を考えているのではないのです。逆に箱の中にいると何も考えることが出来なくなる。私は運ばれる荷物になる。私の中の時間がなくなる。

箱のセッティングをする。男１と吉田がボクシングのまねを始める。スローモーション。吉田がゆっくりと、ゆっくりと倒れる。這いながら、箱の中に入る。男二人が、箱を持ち上げる。台車に乗せて上手に消える。箱が消えていった方を見つめる良。箱が一度だけ大きく揺れる。

良（声）　あの人の中で何かが進行している。
佐々木　冗談が多いね、あの人。
山村　変わり者が多いんだろうあんな連中には。しかし、山師じゃなかった。システムは作った。

三人が退場する。

十八　計算課（朝）

誰もいない部屋に佐々木が入ってくる。

佐々木　（元気よく）おはよう。

布でコンピューターを丁寧に拭き始める。椅子に腰掛ける。コンピューターに話しかける。

佐々木　おはよう。今日一日頼むよ。さあ、一緒に始めよう。

人差し指一本でキーを押し始める。

佐々木　お利口さんだ。もう少し働いておくれ。次の計算は少し難しいけど、君なら平気だ。ほれ、この数字は大切に置いておくんだ。後で使うからね。

いつの間にか、良、女子社員、山村が出社してきている。仕事をする三人。女子社員が電話を取る。山村が良を呼び話をしている。窓の外が明るくなる。会社の一日は全てマイムで。佐々木の席にだけライトが当たる。右手の人差し指が震え始める。それを左の指で押さえつけようとする佐々木。左手で押さえながら、キーを押す。窓の外が暗くなる。ざわめきが起こる。電話の音。山村と良が話し合う声。佐々木に当たっていたライトは消える。佐々木ゆっくり席を立ち、朝と同様に、布でコンピューターを丁寧に拭き始める。暗転。

十九　計算課（朝）

プリンターから出た用紙が、床一面に広がっている。モニターは次々に記号付きの数字が流れている。部屋の真ん中に佐々木が立っている。良が下手から現れる。

良　おはよう。
女子社員　青田さん、あれ。
良　佐々木さん。
佐々木　一晩文句一つ言わずに頑張った。
良　無限ループ。
佐々木　私が言葉を教えたんだよ。この子に。素直で、文句を言わない。働き続けるこんないい子はいないよ。

良、用紙を手に取る。

良　永遠遠に終わらない仕事。無限ループか。

舞台下手に箱が現れる。佐々木が中に入る。ネクタイを取る。眠り始める。突然目を覚まし、時計を見る。ネクタイを締める。立ち上がる。ゆっくりと窓に向かう。暗転。
佐々木が上手の椅子に腰を下ろす。良が佐々木の隣の椅子に腰を下ろす。前出と同じ割烹。

佐々木　家のローンもあるし、子供はまだ学生なのでねえ。又、働かなきゃならないが、それは先のことにするよ。三十五年間働いて、やっと手に入れた休暇だからね。

佐々木がビールを飲む。

佐々木　君とももう会うことはないなあ。
良　時々、顔を見せてくださいよ。
佐々木　もう一本もらおうか。
板前　はい。
佐々木　君に一つだけ言っておかなければならないことがある。

佐々木がビールのコップを置く。

佐々木　あの時、足を押さえていたのは宮城君でも、田中君でもない。（間）私なんだ。知っていたのか。
良　佐々木さんだとは思わなかった。
佐々木　恨むよね。
良　いいえ。仕方がないって思います。
佐々木　あの部屋にはね、奇妙な生き物がいたよ。
良　奇妙な生き物？
佐々木　多分、悪意だなあ。生きていたよそいつは。
良　（間）海老のおどりを頼みましょう。旨いですよ。この前奢ってもらった時、これほど旨いものが世の中にあったのかと思いましたよ。（笑う）大げさですか。
佐々木　いいや、（笑う）俺も食ったことがなかったんだ。（間）あんたと私の敵は…。
良　敵…。
佐々木　多分、同じなんだ。そいつはコンピューターじゃない。世の中の仕組みなんだよ。姿の見えない人間なんだよ。俺達の頭の中にあるコンピューターだ。（間）行こうか。

二人が立ち上がって下手に歩き出す。

佐々木　（身を縮める）寒いね。また、冬が来る。

二人、上手から下手に数歩、歩く。佐々木、立ち止まる。

佐々木　あれは何だろう？
良　焚き火ですねぇ。
佐々木　会社の窓から見える場所だね。
良　そうです、猫町。
佐々木　猫町？
良　いや、まあ。
佐々木　焚き火か。

５，６人の男女が焚き火に集まっている。酒を飲み交わすもの。石を投げるもの。

男　一杯どうだね。
佐々木　私に？
女　他に誰もいないよ。
男　明日から、このあたりがみんな解体されるんだ。
女　だから、お別れ会。
男　どっちみち潰されるんだったら、俺達で叩きつぶす。

男が、石を投げる。男が佐々木に酒をつぐ。

佐々木　あっ、どうも。

佐々木が酒を飲む。

男　あんたも石を投げなよ。すっとするぜ。

良が、投手のようにゆっくりと振りかぶって石を投げる。ガラスが壊れる音。男も石を投げる。

男　ビルが建つんだ、超高層ビル。
女　（泣く）私たちの街が消える。
老人　生まれてからずーと住んでたんだよ。８０年。
女　ひどいね。
男　何もかもコンクリートで塗り込めてさ。
老人　人が住んでいた町が消える。
男　おっ、月が見えるぜ。
女　満月よ。
男　あんな月はもう見られないぜ。
男　（歌う）月が出た出た　月が出た。
女　（歌う）ビルの谷間に月が出た。
女　踊ろ。
良　踊れないよ。
女　何でもいいのよ。こうやって、こうやって。
良　佐々木さん。

二人踊り始める。

佐々木　踊ったことなんかないよな、一度も。
良　そうですね。

踊り狂う人々。その中に佐々木と良が入る。

男　（叫ぶ）火がついたぞ。

踊りが止まる。空を見上げる人々。炎が上がる。下手に久美子がテーブルの前の椅子に腰掛けている。上手から良がドアを開けて入ってくる。

久美子　お帰り。
良　ただいま。遅くなった。
久美子　私も今帰ったところよ。
良　寒くなったね。冬物を取りに家に帰るよ。
久美子　そう。

暗転。

二十　専務室（舞台前方）

山村と良、下手から現れる。山村、ドアをノックする。

専務　どうぞ。

二人、入る。中に吉田と専務がいる。一瞬、吉田に驚く良。彼は紺の背広をきっちりと着こなし、襟につけた社章をさりげなく良に見せる。かしこまって二人、礼をする。

専務　いや、ご苦労さん。それでは、辞令を渡します。山村課長。

山村が一歩前に出る。

専務　地区ブロック課長。職名は変わりましたが、前の部長です。昇進おめでとう、がんばって下さい。

専務、山村に辞令を渡す。

専務　青田君。

青田、一歩前に出る。

専務　システム化に貢献したよね。（笑う）私はまだ算盤だけどね。地区ブロックチーフをお願いします。

専務、良に辞令を渡す。３人が揃って拍手する。

専務　わが社も、本格的なシステム部を持つことになった。そこで、システム部長として吉田君に来てもらうことになった。

吉田、さかんに照れる。専務辞令を渡す。３人が揃って拍手する。

専務　リストラと言うと人員整理というマイナスのイメージで使われるけど、本当の意味はそうじゃない。リストラクチャリングは企業再構築、言葉を換えると経営革新なんだ。それを担うのは君たちだ。頑張ってくれ。山村君は残って、話がある。

３人揃って礼をする。良と吉田が部屋を出る。二人、肩を並べて歩きながら。

吉田　コーヒーでもいかがですか。この階にあるんですよ」

良「ええ」

下手のテーブルに、良と吉田が向かい合って腰掛ける。吉田が襟の社章を見る。

吉田　これ何のマークかなあ？

良　光という字をデザインしてあるんです。

良も吉田にならって、襟の社章を見る。

吉田　なんていう会社でしたっけ？

良　（笑う）光物産ですよ。

吉田　会社の名前も知らない社員か。あらためて、青田さん、昇進、おめでとうございます。

良　三人の職場ですよ。それと、運がよかった。

吉田　運じゃないです。あなたの努力です。システムが出来たのも、地道にやってくれた貴方がいてくれたからです。

良　でも、驚きました。吉田さんと同じ会社になるなんて。

吉田　（自嘲的に）飼い犬になっちまったんです。
良　…。
吉田　まあ、前の会社に比べて安定はしました。

ウェートレスがコーヒーを運んでくる。

良　私と同類は何人いますか？
吉田　三人います。全く同じ数字をインプットしています。それを中央のコンピューターに送り、照合させています。
良　一つ質問していいですか？
吉田　ええ。
良　私たちの仕事、機械で出来ますか？
吉田　末端まで電子化出来れば可能ですね。
良　算盤が消えたように。
吉田　算盤が消えたようにですか？でも、今は無駄だなあ。私たちは頭脳というとてつもない回路を持っている。（吉田、額を指さす）人間を考えないシステムは根本的な改良が必要となります。巨額な金がいります。それよりも、人の回路を定年まで使った方が安上がりだ。
良　（ふと）やはり算盤だと思う。
吉田　算盤？
良　算盤の音が消えた。その日から、何かが変わった。こわれた。
吉田　貴方は使い走りだったんですよ。貴方は連中に勝ったんですよ。
良　（小さく）勝った？
吉田　人間には機械よりももっと素晴らしいものがあると思います。愛とか夢とか機械には出来ないものが。酒にも酔える
良　死ぬのも
吉田　煙草、いいですか？
良　ええ。
吉田　４０才になって、煙草、始めちゃった。本当は止める頃ですよねぇ。

吉田、煙草の火を付ける。

良　何故生きているのか分からないんですよ。

吉田、煙草の煙をため息のように吐く。

良　愛ですか。人を思いやる心ですか。私は利己主義です。自分が

安全なら、他人がどうなったってかまわない。なのに、いつも善人ぶっている。自分の名刺が汚れないことだけを考えている。

吉田、煙草を灰皿において、コーヒーを一口飲む。

吉田　青田さんは結婚はまだですね。私は子供が二人。それが飼い犬になっちまった理由ですよ。つまらないですか。

良　いいえ、羨ましいですよ。

二人黙る。間をおいて立ち上がり、上手に歩き出す。

吉田　今度、機会があれば飲みに行きましょう。難しい話は抜きで、あなたとゆっくり飲みたい。

良　いつでも電話して下さい。

吉田　電話しますよ。

良　機械が喋るのはどうなりましたか？

吉田　そんなこと言ってましたねぇ。前の会社においたままだ。完成まであと一歩なんですが。自分の声を分析して、結局は自分の声にしましたよ。

良　声もデジタルですか。

吉田　アナログですよ。でも突き詰めればデジタルになる。あの箱の中が無性に懐かしいです。あそこには自分しかいなかった。自分を感じることが出来た。

肩を並べて歩く。下手端で二人止まる。

良　エレベーターに乗らないんですか。

吉田　その箱は苦手なんですよ。

エレベーターのドアーが開く。音だけでも可。良、乗り込む。吉田は片手を上げて別れの会釈をする。ドアーが閉まる瞬間。吉田が叫ぶ。

吉田　嘘なんだ。（叫ぶ）全部嘘なんだ。

暗転。

二十一　計算課（朝）

背を向けて、窓の外を見ている男がいる。

良（声）　窓の外を眺めているのは佐々木さんだと思う。三人の社員は彼が存在しないかのように仕事をしている。午後５時になるといつの間にか彼の姿が消える。

電話の音。

女性社員　ハイ、光物産、計算課です。青田ですか、少々お待ち下さい。青田さん、アークシステムさんから電話です。

良 アークシステム？ハイ、代わりました。えっ、吉田さんが。

暗転。

二十二　アークシステムオフィス（前出と同）

下手から良。上手に箱がある。

社員１　どうも、ご足労を。

社員２　まだ警察に知らせてないんですよ。

社員１　１１９かな。だけど、朝、来た時、冷たくなっていたから。テレビなんかじゃ、死んでいる時は、１１０番だよね。

良　家族の人には。

社員１　まだなんです。家は福井ですから。

良　結婚されてたんじゃ。

社員２　独身ですよ。ずーと。

良　（間）あそこですか。

社員１　ええ、箱の中です。あんな狭い所で首を括るの大変だったでしょう。昨日の夜から来ていたらしいんです。管理人が、吉田さん来ているよって。何してたんだろう？

社員２　会社を出て行った人が、死にに帰ってくるなんてねぇ。あの箱を早く片づけりゃよかった。

社員１　機械は自殺できないなんて、変なことを言い出しましてね。その時に気づけばよかった。結局、自分で電源を切っちまった。

社員２電話をかける。良、床に落ちている、糸電話を拾い上げる。

良　結局、貴方のことは何にも知らなかった。

糸電話を口元にあてる。

良　もし、もし。

糸電話を耳にあてる。

良　そこにいるんでしょ。もし、もし。

社員１　最初にあなたに知らせました。

良　どうして僕に。

社員１　メッセージがありました。あなたの名前と電話番号。それと…。彼が来たら、キーを叩けって。

社員１メモを見ながらキーボードを叩く。

吉田の声　ご無沙汰。青田さん、聞こえるかい。また、何処かで会おう。

暗転。

二十三　　ほおずき市

良　来てよかったね。ほおずき市

久美子　ほおずきも買ったし、ホタルも買った。

良　帰ろうか。

久美子　うん。

二人が、下手に向かって並んで歩く。アパートのドアを開ける。

居間のテーブルに、良と久美子が向かい合って腰掛ける。テーブルの上にホタルを入れた籠がある。籠の中を見つめる二人。

久美子　ホタルって、何のためにひかるの。誰かを探しているのかなあ。

良　探しているのだと思う。

久美子　いくら探して見つからない。私もホタル。

良　僕は君を見つけたと思っている。

久美子　（ふと）同居人なんだ、私たち。

良　…。

久美子　同じお風呂を使い、洗面所を使い、トイレを使い、一緒に

ご飯を食べる。
良　籍を入れてもいいよ。
久美子　最初はそう思っていたの。でも、結婚なんて関係なかった。思い切って言うわ。私たち、一度も触れあったことないのよ。そんなのあるのかなあ。セックスして欲しいって言っているのじゃないわ。
良　僕は君を大切にしたかった。壊したくなかった。
久美子　壊れる？
良　触れれば壊れる。
久美子　かわいそうな人。壊してもよかったのに。
良　本当に？
久美子　うん。

良と久美子指を絡める。良が静かに指を離す。

久美子　（いたずらっぽく）私、良が自分でしているのを知っているよ。
良　のぞき見したんだね。裏切った。
久美子　夜中に目が覚めたの。悲しかった。（長い間）裏切った。裏切ったのは、あなたよ。

下手に猫町の女（全裸）。ひざまずき窓から、外を眺めている。立ち上がり窓を開ける。

良　僕は僕のことしか知らない。知っているの僕だけ。その僕を見失った。ふっと消しゴムで消すように。君のこと好きだから、触れられない。君を壊したくない。

久美子はシャツを脱ぐ。猫町の女、消える。久美子、ブラジャーを取る。

久美子　触って。

見つめ合う二人。良は右手を乳房に向かって差し出す。手は、久美子に触れる直前で止まる。良の手がテーブルに落ちる。

良　怖いんだ。
久美子　（慰めるように、少し涙ぐんだ声で）いいよ、もう、蛍を放そ。

籠に手を入れ、ホタルを掌にのせる。二つの光が、点滅する。

久美子　君たちも出逢った。

久美子、ブラジャーを着ける。シャツを着る。

良　好きなんだ君のこと。

久美子　分かってるわ。ありがとう、電気を消すね。

暗くなる。

久美子　良、何処にいるの。

良　君の前にいるよ。

久美子　出逢えてよかった。

良と久美子の唇が触れる寸前で止まる。小さく、音楽。

久美子　光っている。

良　あっ、飛んだ。

久美子　きれいね。あそこにとまった。

良、すすり泣く。

良　きれいね。

久美子　泣いていいよ。でも、良、壊れたらダメ。

良　逃がしてやろう。

久美子　うん。楽しかったよ、ほおずき市。ホタル。小さな小さな命。ありがとう、良。

良　ありがとう、久美子。

久美子　窓を開けよう。

久美子、立ち上がり、窓を開ける。

久美子　飛んで行け。何処へ行くの。だけど、小さな籠の中より、きっといいね。せめて１０日のいのち。思い切り飛んで。

久美子、立ち上がる。

久美子　それじゃ、私、行くね。

久美子が出て行く。良、蹲る。マスターベーションのマイム。ホタルの光が行き交い、やがて、窓から消える。良、果てる。ズボンをなおし、冷蔵庫を開ける。牛乳を取り出しコップに注ぐ。ゆっくりと飲み干す。

暗転。

二十四　計算課

背を向けて、窓の外を見ている男がいる。

良（声）　今日も佐々木さんが来ている。ビルを眺めている。切り取られた過去のように。

山村　青田君。

良　はい。

山村　書類をあのビルの１０階山田事務所にまで持っていってもらいたいんだ。ここから見える。あそこだ。

良　あのビルですか。行ったことがない。

山村　行ったことがない。目の前にあるじゃないか。子供だって行けるよ。ぐるーと回れば正面に出る。

良　中の様子が分からないです。

山村　略図があるよ。３０階までエレベーターで上がればいいんだよ。（笑いながら）そうして、２０階降りろよ。

良が男に呼びかける。

良　佐々木さん一緒に行きませんか。あなたと話がしたい、ビルの中に一緒に入りませんか。

黒い布を被った男がゆっくりと振り返る。暗転。

良（声）　男には顔がなかった。その男が私であることが分かるまで随分と時間がかかった。

二十五　窓の中のビル

舞台装置は何もいらない。全ての道具を片づける。その為に時間がかかってもよい。何もない舞台。声の科白は良とは別の出演者。久美子でも可。

（声）　ビルの中には誰もいなかった。エレベーターがいくつもあった。数えられないほどあった。

エレベーターの扉が閉まる音。上昇する音。止まる音。扉が開く音。単調な繰り返しが続く。

（声）　どうしてこんなにたくさんのエレベーターがあるんだろう。

良、客席に背を向ける。エレベーターの扉が開く音。良、乗り込む。正面を向く。上昇する音。止まる音。扉が開く音。

（声）　同じドアーが並んでいる。

良、下手に向かって歩き出す。下手に消える。上手から現れる。

（声）　みんな同じドアーだ。

ドアーを開けるマイム。

（声）　誰もいない。会社の窓から、僕を見ているのは僕だ。（叫ぶ）消えろ。（両手で顔をふさぐ）見ないでくれ。

良、また、歩き始める。止まる。

良　山田商事。ここか。

ドアーを開ける。

（声）　巨大な窓がある。

窓の外を見ていた吉田が振り返る。

吉田　やあ、お久しぶり。

良　吉田さん。

吉田　待っていたよ。

吉田、良に近づく。

吉田　さぁ、もうすぐ来るぞ。

二人、肩を並べて窓に向かう。窓ガラスが震える音。飛行機の音が次第に大きくなる。

（声）　窓硝子が震え始める。高層ビルの間を、真っ直ぐに飛行機がこちらに向かってやってくる。

吉田　（叫ぶ）来た。

衝撃音。

幕